

〔資 料〕

## 説得におけるヒューリスティック処理とシステムティック処理の加算効果 —説得者の信憑性・論拠の質・話題への関与の効果—<sup>1)</sup>

伊 藤 君 男

愛知学院大学<sup>2)</sup>

### 要 約

本研究の目的は、ヒューリスティック-システムティック・モデル (Chaiken, 1986) に基づき、説得的メッセージのヒューリスティック処理とシステムティック処理との加算効果と減弱効果に対する関与の程度の影響を検討するものである。実験は関与 (高・中・低)・論拠の質 (強・弱)・説得者の信憑性 (高・低) を操作して行った。実験の結果、話題への関与が高い場合には、説得効果は論拠の質のみの影響を受けたのに対して、話題への関与が中程度の場合には、論拠の質と説得者の信憑性の影響が共に認められた。また、話題への関与が低い場合には、説得効果は説得者の信憑性のみの影響を受けていた。これらの結果より、高関与はヒューリスティック処理の影響を減弱させる効果を導き、中関与はヒューリスティック処理とシステムティック処理の加算効果を導くことが示唆された。

キーワード：ヒューリスティック-システムティック・モデル、加算効果、説得者の信憑性、話題への関与

説得研究において、情報処理の認知過程を重視しているモデルの一つが、Chaiken (1980), Chaiken, Liberman, & Eagly (1989) のヒューリスティック-システムティック・モデル (the heuristic-systematic model: 以下, HSM と略記) である。このモデルは、被説得者による説得的メッセージの処理を、認知的努力 (cognitive effort) を必要としないヒューリスティック処理 (heuristic processing) と認知的努力を要するシステムティック処理 (systematic processing) との、2つの処理モードに分類しており、説得における二重過程 (dual process) に着目したモデルと言えよう (Chen & Chaiken, 1999)。システムティック処理は、被説得者が受け取った情報に関して、積極的に精緻化を行う処理モードである。一方、ヒューリスティック処理は、システムティック処理よりも、被説得者の思考や能力がより必要とされ

ない処理モードである<sup>3)</sup>。

HSM では、システムティック処理とヒューリスティック処理が各々単独で生起するだけでなく、一定の条件下では2つの処理モードが同時生起する (co-occur) 場合もあると考えられている (Chaiken, et al., 1989; Eagly & Chaiken, 1993)。2つの処理モードの同時生起の様相を説明するものとして、HSM は加算効果 (additivity hypothesis) および減弱効果 (attenuation hypothesis) を提起している (Chaiken, et al., 1989; Chaiken & Maheswaran, 1994; Chen & Chaiken, 1999; Maheswaran & Chaiken, 1991; Maheswaran, Mackie, & Chaiken, 1992)<sup>4)</sup>。

HSM は、人間が必要に応じてのみ、情報の複雑かつ活発な認知的処理を行うという「最小努力原理 (the least effort principle)」(Chaiken, 1980) もしくは「認

1) この研究の一部は日本社会心理学会第42回大会で発表された。

2) 本研究の作成に当たって、愛知学院大学文学部教授久世敏雄先生に貴重な御助言を頂いたことを感謝いたします。愛知学院大学文学部教授岡本真一郎先生には実験実施の一部に御協力いただくと共に、貴重な御助言をいただきましたことを感謝いたします。

知的儉約者 (cognitive miser)」(Taylor, 1981) の概念に基づいている。したがって、HSM では、通常は認知的努力を少なくするため、説得的メッセージの精緻な処理であるシステムティック処理ではなく、ヒューリスティック処理のみが生起すると考えられている。しかし、被説得者にメッセージを精緻に処理する動機づけがある場合には、2つの処理モードが独立・並列的に説得効果に影響を与える場合がある(加算効果)し、また、ヒューリスティック処理が抑制されることにより、結果的にシステムティック処理が単独で説得効果をもたらす場合もある(減弱効果)。加算効果と減弱効果の相違は、どのような要因に規定されるのであろうか。

Maheswaran et al. (1992) の実験では、2つの処理モードの加算効果と減弱効果を検討するため、説得話題への関与 (issue involvement)・ヒューリスティック手掛かり (ブランドネーム)・メッセージ内容进行操作して実験が行われた。関与の操作は、被説得者の動機付けの程度を変化させるものである (HSM の研究において、関与はシステムティック処理を生起させる動機づけに影響を与える変数として頻繁に使用されている (Petty & Cacioppo, 1979, 1990; Johnson & Eagly, 1989, 1990))。実験の結果、低関与条件では、説得効果は一貫してヒューリスティック手掛かりのみの影響を受けていた。しかし、高関与条件の被験者は、手掛かりと内容が一致している条件 (例えば、肯定的手掛かり-肯定的メッセージ内容) では、ヒューリスティック処理とシステムティック処理の両方が態度に影響を与えていた。一方、手掛かりと内容が一致しない条件 (例えば、肯定的手掛かり-否定的メッセージ内容) では、システムティック処理のみの影響を受けていた。この結果について、Maheswaran et al. (1992) は、2つの処理モードが一致する情報を処理する場合には (例えば、肯定的手掛かり-肯定的メッセージ内容)、ヒューリスティック処理とシステムティック処理は独立に説得効果に影響を与える加算効果を示し、2つの処理モードが相反する情報を処理する場合には、システムティック処理から得られる認知内容に頼って判断を下す傾向が高くなるため、システムティック処理が優勢になる減弱効果を示すと主張している。

しかし、これ以外の大半の研究は、ヒューリスティック処理とシステムティック処理のどちらか一方が説得効果に対して影響を与える様相を検討しているものである (Chaiken, 1980; Chen & Chaiken, 1999; Eagly & Chaiken, 1993)。そして、その結果は Maheswaran et al. (1992) とは一致しない点がある。典型的な HSM

の実験である Chaiken (1980) では、関与とメッセージ内容とヒューリスティック手掛かり (説得者の魅力) を操作して実験が行われている。その結果、高関与条件の被験者ではシステムティック処理が優勢となり、メッセージ内容の影響のみによって説得効果が決定された。一方、低関与条件の被験者ではヒューリスティック処理が優勢となり、メッセージ内容ではなく手掛かりによって説得効果が影響を受けていた。すなわち、Maheswaran et al. (1992) の結果とは異なり、手掛かりと内容が相反した情報でなくとも (例えば、肯定的手掛かり-肯定的内容)、高関与条件の被験者は一貫して減弱効果 (説得効果に対してシステムティック処理のみが影響) を示している。つまり、Maheswaran, et al. (1992) と Chaiken (1980) を比較すると、Chaiken (1980) では、関与の高さがシステムティック処理の生起とヒューリスティック処理の影響の減弱という2つの役割を果たしている。しかし、Maheswaran, et al. (1992) では、関与の高さはシステムティック処理の生起を導く役割のみを果たしており、ヒューリスティック処理の影響の減弱に対する役割を果たしていない。Chaiken (1980) の結果との食い違いについて、Maheswaran, et al. (1992) は言及していないが、関与の要因が、2つの処理モードの加算効果と減弱効果の相違に影響を与えている可能性が考えられる。

高関与条件において、加算効果と減弱効果が認められた Maheswaran, et al. (1992) と減弱効果のみが認められた Chaiken (1980) の結果の相違は、操作された関与の程度の相違によって解釈可能であると思われる。Chaiken (1980) の実験では「大学が二学期制から三学期制へ変化すること」が説得話題として選択され、関与はその学期制の変更が被説得者の在学中に施行されるか否かによって高低が操作されていた。それに対して、Maheswaran et al. (1992) の実験では、コードレス電話の新製品である「CT-100」の評価が説得話題として選択され、メーカー側がユーザーの意見を重要視するか否かと教示されることによって、関与は操作されている。これらの両実験の高関与条件にはその程度にかなりの相違があるように思われる。Chaiken (1980) においては、その説得自体が被説得者の将来の生活に大きく関わるものであるが、Maheswaran, et al. (1992) においては、生活に必須の事柄ではない。したがって、Maheswaran, et al. (1992) の高関与条件は、Chaiken (1980) の高関与条件と比較すると、相対的に関与が低かった可能性が考えられる。したがって、説得事態における関与の役割は以下のように考えられよう。まず、関

与の高さはシステムティック処理を生起させる。しかし、より詳細に高関与を2分した場合には、非常に高い関与では、ヒューリスティック処理の影響を抑制して説得効果に対する影響を減弱させる。中程度に高い関与ではヒューリスティック処理の影響を抑制しない。この観点より2つの実験の結果を解釈すると以下になる。Chaiken (1980) の高関与条件は関与が十分に高いため、システムティック処理の生起とヒューリスティック処理の影響の減弱をもたらしたと思われる。一方、Maheswaran et al. (1992) の手掛かり-内容一致条件では、高関与条件の場合でも、関与の程度はあまり高くなかったため、ヒューリスティック処理の影響が減弱されなかったのではないかと考えられる。そのため加算効果が認められたものと思われる。ただ、手掛かり-内容不一致条件でも、関与はそれほど高くはないが、不一致が存在するという意外性のためにメッセージを処理しようとする動機づけが高まり、減弱効果が生じたのではないだろうか。

したがって、加算効果と減弱効果の生起の過程は以下のものであると考えられる。(1) メッセージを処理する動機づけがない場合(低関与)は認知的努力低減の動機づけのみが存在するため、ヒューリスティック処理のみが生起して説得効果に影響を与える。(2) メッセージ処理の動機づけが生じた場合でもそれが中程度に強い場合には、認知的努力低減の動機づけとメッセージ処理に対する動機づけが並列するため、ヒューリスティック処理とシステムティック処理の両方が生起して説得効果に影響を与える。(3) メッセージ処理の動機づけが非常に強い場合には、認知的努力低減の動機づけが抑制されるため、結果的にシステムティック処理のみが生起して説得効果に影響を与える。これらの過程は、ヒューリスティック手掛かりと説得的メッセージの存在が前提とされており、いずれか一方を欠く場合には異なった過程が考えられよう (Chaiken & Maheswaran, 1994; Chen & Chaiken, 1999)。以上に示してきたように加算効果と減弱効果は2つの動機づけのバランスによって決定されていると考えられる。しかし、認知的努力低減の動機づけは初期値として機能しているため、結果的にメッセージ処理の動機づけの程度の変化に従って加算効果や減弱効果は生起することになる。このメッセージ処理の動機づけの程度に大きく影響するのが関与の程度である。関与の程度を操作し、動機づけの程度の相違による加算効果と減弱効果が生起する様相を検討した研究は、これまでに存在しない。本研究はこの点に着目する。すなわち、本研究は、話題への関与の程度が、どのようにヒューリスティック処理やシステムティック処理の加算効果と減弱効果

を生起させるかを検討するものである。

従来の説得研究においては、話題への関与の程度は、典型的には高低2水準に設定されてきた (Chaiken, 1980; Maheswaran & Chaiken, 1991; Maheswaran, et al., 1992)。しかし、前述した Maheswaran, et al. (1992) の実験では、低関与条件、高関与手掛かり-内容一致条件 (加算効果を示す)、高関与手掛かり-内容不一致条件 (減弱効果を示す) の順に、動機づけの程度が連続的に高くなっていったと考えられる。Maheswaran, et al. (1992) では関与と他の要因が絡んで動機づけの程度が影響されているが、前述のように、本研究では関与の要因のみを取り上げるため、関与が強くなるに従って、(1) ヒューリスティック処理優勢、(2) ヒューリスティック処理とシステムティック処理の加算効果、(3) システムティック処理優勢 (減弱効果) という順で、2つの処理モードの関係は変化していくことが予想される。したがって、今回の実験では、話題への関与の程度を2水準 (高・低) ではなく、3水準 (高・中・低) に操作する。

以上に示してきたように、本研究で取り上げる重要な要因は関与の変数である。そのため説得話題の設定も関与の操作に関わるため重要である。それに加えてメッセージ内容の要因とヒューリスティック手掛かりの要因の操作も重要である。まず、本研究で取り扱う説得話題は卒業試験の導入である。これは被験者である大学生にとって身近な話題であり、従来の研究でも頻繁に使用されている (伊藤, 1999; Petty & Cacioppo, 1979; Petty, Cacioppo, & Goldman, 1981)。そして、本研究では、ヒューリスティック手掛かりとして説得者の信憑性 (Chaiken & Maheswaran, 1994; DeBono & Harrish, 1988; Petty, Cacioppo, & Goldman, 1981) を、メッセージ内容に関しては論拠の質の強弱を操作した (Petty & Cacioppo, 1979; Petty & Wegener, 1998; Wegener, Downing, Krosnick, & Petty, 1995)。これらの要因は、HSM の研究では頻繁に使用されており (Petty & Wegener, 1998)、変数として選択する妥当性は高いと思われる。

以上をまとめると、仮説は以下のようである。(1) 話題低関与条件では、説得者の信憑性の影響 (主効果) のみが見られるであろう。(2) 話題中関与条件では、説得者の信憑性と論拠の質の両方の影響 (主効果) が認められるであろう (加算効果)。(3) 話題高関与条件では、論拠の質の影響 (主効果) のみが見られるであろう (減弱効果)。

## 方 法

**予備調査** 今回の実験での話題への関与の操作を有効なものとするための予備調査を行った。説得話題は「大学生・短大生に卒業試験を課す」というものであり、その卒業試験の実施対象（自分の大学・短大/他の大学・短大）・実施時期（1年後/6年後）・実施見込み（教授会を通過し、学長の承認済み/教授会も通過しておらず、学長の承認もまだである）を操作し、卒業試験導入についての関与の程度についての6種類の状況を作成した（Table 1を参照）。それらの全ての状況に対する被験者の個人的な関わり方の程度について、「関わりがある－関わりがない」（7点尺度；ある＝7，ない＝1）で回答を求めた。被験者は37名（大学生15名・短大生22名）である。分散分析（被験者内要因）を行ったところ有意差が認められたため（ $F(5, 180) = 86.21, p < .001$ ），下位検定（テューキーのHSD）を行ったところ，状況1，状況2・5，状況3・4・6の間で有意差が認められた

（5％水準， $HSD = 0.83$ ）。関与の操作を高・中・低の3水準とするため，卒業試験の実施対象が他大学になっている状況を除外し，また同程度の評定値の状況間では標準偏差の小さい状況を選択した。その結果，最終的に状況1，2，4が選択され，実際の操作に使用された。

**被験者** A大学学生89名（1，2年生），C大学学生205名（1年生），合計294名（男性186名，女性106名）を対象に実験を行った。被験者は全て私立大学の学生である。

**実験条件** 話題への関与（高・中・低）×説得者の信憑性（高・低）×論拠の質（強・弱）。各実験条件の被験者数は，Table 2を参照のこと。

**手続き** 実験は，卒業試験の導入に関する調査であり，卒業試験導入についての意見を読み，自分が在学している大学に卒業試験が導入されることについての意見を求めるとの指示を与え，被験者には，本来の目的を伏せて行った。独立変数が操作してある説得的メッセージや，従属変数の測定などを含む冊子を，各被験者に配付

Table 1  
予備調査で使した6種類の状況および話題への関与度の平均点と標準偏差

|                                                                                                                                       | <i>M (SD)</i> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|
| (1) もし，自分の大学・短大で卒業試験の導入が1年後に予定されており（つまりあなたの在学中），そしてその案は教授会を通過し，学長の承認も得ているため，ほぼ実施される見込みが高いとしたら，この卒業試験の導入はどの程度，あなたに関わりがあると思いますか？        | 6.49 (0.80)   |
| (2) もし，自分の大学・短大で卒業試験の導入が1年後に予定されているが（つまりあなたの在学中），その案はまだ教授会を通過しておらず，また学長の承認も得ていないため，ほぼ実施される見込みが低いとしたら，この卒業試験の導入はどの程度，あなたに関わりがあると思いますか？ | 3.38 (1.59)   |
| (3) もし，自分の大学・短大で卒業試験の導入が6年後に予定されており（つまりあなたの卒業後），そしてその案は教授会を通過し，学長の承認も得ているため，ほぼ実施される見込みが高いとしたら，この卒業試験の導入はどの程度，あなたに関わりがあると思いますか？        | 1.73 (1.45)   |
| (4) もし，自分の大学・短大で卒業試験の導入が6年後に予定されているが（つまりあなたの卒業後），その案はまだ教授会を通過しておらず，また学長の承認も得ていないため，ほぼ実施される見込みが低いとしたら，この卒業試験の導入はどの程度，あなたに関わりがあると思いますか？ | 1.48 (1.19)   |
| (5) もし，他の大学・短大で卒業試験の導入が1年後に予定されており（つまりあなたの在学中），そしてその案は教授会を通過し，学長の承認も得ているため，ほぼ実施される見込みが高いとしたら，この卒業試験の導入はどの程度，あなたに関わりがあると思いますか？         | 3.32 (2.00)   |
| (6) もし，他の大学・短大で卒業試験の導入が1年後に予定されているが（つまりあなたの在学中），その案はまだ教授会を通過しておらず，また学長の承認も得ていないため，ほぼ実施される見込みが低いとしたら，この卒業試験の導入はどの程度，あなたに関わりがあると思いますか？  | 1.84 (1.34)   |

$N = 37$

した。このとき12種類の冊子の1種類をランダムに配付することにより、被験者を各実験条件に割り当てた。実験の進行は、実験者の指示で統制し、被験者が自由に先に進まないように注意した。説得的メッセージは、4分間に時間を制限して一斉に読ませた。また、被験者には、注意深く読むように指示した。次に、従属変数の測定を行い、5分間の時間制限で思考リストに回答させた。最後にデブリーフィングを行った。

**独立変数の操作** 独立変数の操作は、話題への関与、説得者の信憑性、論拠の質（説得的メッセージ）の順序で行った。

(a) **話題への関与** 冊子の第2ページで話題への関与の操作がなされた。予備調査の結果に基づき、卒業試験の導入予定時期と導入の見込みを操作し、関与を以下のように3水準に設定した。話題高関与条件：「実は、××大学では、卒業試験の導入が1年後に予定されており（つまりあなたの在学中）、そしてその案は教授会を通過し、学長の承認も得ているため、ほぼ実施される見込みが高いのです」。話題中関与条件：「実は、××大学では、卒業試験の導入が1年後に予定されていますが（つまりあなたの在学中）、その案はまだ教授会を通過しておらず、また学長の承認も得ていないため、ほぼ実施される見込みが低いのです」。話題低関与条件：「実は、××大学では、卒業試験の導入が6年後に予定されていますが（つまりあなたの卒業後）、その案はまだ教授会を通過しておらず、また学長の承認も得ていないため、ほぼ実施される見込みが低いのです」。

(b) **説得者の信憑性** 冊子の第3ページで説得者の信憑性の操作がなされた。高信憑性条件の被験者には、説得的メッセージが「東京大学教育学部の教授が議長を務めている、高等教育についての調査委員会が立案したレポートの抜粋」であると教示した。一方、低信憑性条件の被験者には、「愛知県内にある高校の3年生のクラスにおけるホームルーム内で、ディスカッションされた「大学における卒業試験導入の是非」の内容をまとめたレポートを抜粋したもの」であると教示した。

(c) **論拠の質** 冊子の第4ページで説得メッセージが与えられ、そこで論拠の質の操作がなされた。その操作は、伊藤（1999）の実験で使用した操作を用いた。強論拠メッセージには、卒業試験の導入が、学生の学力向上につながるといった主旨の文章を用いた。弱論拠メッセージには、試験の導入が大学の経営状況安定につながるといった主旨の文章を用いた。文字数は両条件ともに約700字程度である。なお、被験者は全て私立大学の学生であるため、大学の経営安定の話題は不自然ではない

と考えられる。

**従属変数 (a) 卒業試験導入に関する態度** 冊子の第5ページで卒業試験導入についての態度を測定した。測定に使用された項目は、卒業試験導入に対する同意度（1＝非常に反対，7＝非常に賛成）の7点尺度と，4つの形容詞対からなる卒業試験導入に対する評価（「良い－悪い」「賢い－愚かな」「利益のある－利益のない」「好ましい－好ましくない」全て7段階尺度；1点＝否定的評価反応，7点＝肯定的評価反応； $\alpha = .85$ ）である。

(b) **認知反応の測定** 冊子の第6ページで認知反応を測定するため、思考リスト法を用いた。思考リスト法で得られた被験者の認知反応を、筆者と実験条件について何も知識を持たない評定者の2名でコーディングした。評定者間の一致率は88%であった。一致しなかった項目については、評定者の間で再検討して決定された。分類手順としては、思考の総数を算出して、その内容をメッセージに関する思考・説得者に関する思考・その他に対する思考に分類した。メッセージに関する思考と説得者に関する思考は、好意的思考・中性的思考・非好意的思考に分けられ、その個数を数えた。

(c) **操作チェックのための項目** 冊子の第7ページにおいて操作チェックに関する項目が測定された。話題への関与は、「卒業試験の導入はどの程度、あなたに関わりがあると思いますか」の項目で測定された（7点尺度；1＝非常に関わりがない，7＝非常に関わりがある）。説得者の信憑性は、「先ほどのレポートを作成した委員会（高校生たち）は、どのくらい信頼できると思いますか」の項目（7点尺度；1＝非常に信頼できない，7＝非常に信頼できる）と「先ほどのレポートを作成した委員会（高校生たち）について、どれくらい専門的と感じましたか」の項目（7点尺度；1＝非常に専門的でない，7＝非常に専門的である）の2項目によって測定された。メッセージの論拠の質は、「卒業試験を導入することについての意見は、どれくらい納得できるものでしたか」の項目（7点尺度；1＝非常に納得できない，7＝非常に納得できる）によって測定された。測定の順序は、話題への関与の項目、説得者の信頼性の項目、説得者の専門性の項目、メッセージの納得度の項目の順であった。

## 結 果

**操作チェック** 独立変数の操作の有効性を確かめるため、独立変数と直接関係のある評定項目への回答について、3（話題への関与：高・中・低）× 2（説得者の信

憑性：高・低）× 2（論拠の質：強・弱）の分散分析を行った（各項目の得点に関しては Table 2 を参照のこと）<sup>5)</sup>。話題への関与の項目については、話題への関与の有意な主効果が認められた（ $F(2, 282)=10.96, p<.001$ ；話題高関与： $M=5.08$ ；話題中関与： $M=4.53$ ；話題低関与： $M=3.87$ ）。そのため、下位検定（テューキーの HSD 検定）を行ったところ、話題高関与条件と話題低関与条件の間および話題中関与条件と話題低関与条件の間に有意差が認められ（5%水準， $HSD=0.62$ ），話題高関与条件と話題中関与条件の間で差の傾向が認められた（10%水準， $HSD=0.53$ ）。説得者の信憑性（信頼性）の項目については、説得者の信憑性の有意な主効果（ $F(1, 282)=17.26, p<.001$ ；信憑性高： $M=4.21$ ；信憑性低： $M=3.44$ ）が認められた。また、説得者の信憑性（専門性）の項目については、説得者の信憑性の有意な主効果（ $F(1, 282)=4.70, p<.05$ ；信憑性高： $M=4.24$ ；信憑性低： $M=3.85$ ）が認められた。論拠の質の項目は、論拠の質の有意な主効果が認められた（ $F(1, 282)=20.24, p<.001$ ；強論拠： $M=4.16$ ；弱論拠： $M=3.25$ ）。なお全項目において、ここに記述した以外の主効果および交互作用は認められなかった。操作チェック測定に関して操作条件間に有意差が認められたという意味で、それぞれの要因の操作の相対的な有効性は認められたものの、尺度の全ての項目で値が中央値

に近い点から見ると、操作が充分ではない可能性がある。結果の解釈においてはこの点を考慮する必要がある。

**態度** まず、卒業試験導入に対する評価について、3（話題への関与）× 2（説得者の信憑性）× 2（論拠の質）の分散分析を実施したところ（各条件別の評価得点については、Table 2 を参照のこと），論拠の質の有意な主効果（ $F(1, 282)=7.21, p<.01$ ；強論拠： $M=4.11$ ；弱論拠： $M=3.52$ ）と説得者の信憑性の有意な主効果（ $F(1, 282)=9.07, p<.01$ ；信憑性高： $M=4.14$ ；信憑性低： $M=3.48$ ），および話題への関与×論拠の質の交互作用の傾向（ $F(2, 282)=3.00, p<.10$ ）と話題への関与×説得者の信憑性の交互作用の傾向（ $F(2, 282)=2.79, p<.10$ ）が認められた。話題への関与×論拠の質の交互作用について、下位検定を行ったところ、話題高関与条件の強論拠条件と弱論拠条件の間（ $F(1, 282)=5.87, p<.05$ ；強論拠： $M=4.28$ ；弱論拠： $M=3.35$ ）と話題中関与条件の強論拠条件と弱論拠条件の間（ $F(1, 282)=7.42, p<.01$ ；強論拠： $M=4.19$ ；弱論拠： $M=3.17$ ）でそれぞれ論拠の質の有意な単純主効果が認められた。また、話題への関与×説得者の信憑性について、下位検定を行ったところ、話題中関与条件において信憑性の有意な単純主効果が認められ（ $F(1, 282)=4.02, p<.05$ ；信憑性高条件： $M=4.06$ ；信憑性低条

Table 2  
実験条件別の各従属変数の平均と標準偏差

|               | 高関与        |            |            |            | 中関与        |            |            |            | 低関与        |            |            |            |
|---------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
|               | 高信憑性       |            | 低信憑性       |            | 高信憑性       |            | 低信憑性       |            | 高信憑性       |            | 低信憑性       |            |
|               | 強論拠        | 低論拠        | 強論拠        | 低論拠        | 強論拠        | 低論拠        | 強論拠        | 低論拠        | 強論拠        | 低論拠        | 強論拠        | 低論拠        |
| 関与            | 5.40(1.32) | 4.54(1.81) | 5.40(1.55) | 4.96(1.60) | 4.84(1.60) | 4.60(2.00) | 4.23(1.86) | 4.44(1.83) | 3.64(2.04) | 3.87(1.93) | 4.33(1.49) | 3.65(1.94) |
| 信憑性（信頼性）      | 3.88(1.67) | 4.36(1.58) | 3.42(1.47) | 3.62(1.47) | 4.36(1.25) | 4.23(1.63) | 3.26(1.79) | 3.52(1.53) | 4.00(1.68) | 4.41(1.32) | 3.35(1.87) | 3.43(1.70) |
| 信憑性（専門性）      | 3.92(1.71) | 4.12(1.42) | 3.75(1.45) | 3.71(1.08) | 4.48(1.22) | 4.08(1.71) | 3.80(1.94) | 3.92(1.68) | 4.46(1.58) | 4.54(1.44) | 4.26(1.63) | 3.70(1.58) |
| 論拠の質          | 3.60(1.66) | 3.54(1.82) | 4.52(1.71) | 3.08(1.72) | 4.68(1.52) | 3.20(1.98) | 4.00(1.81) | 3.20(1.68) | 3.76(1.50) | 3.09(1.59) | 4.41(1.59) | 3.39(1.80) |
| 評価（態度）        | 4.22(1.93) | 3.39(1.70) | 4.24(2.10) | 3.31(1.60) | 4.66(1.72) | 3.46(2.27) | 3.73(1.86) | 2.88(1.58) | 4.28(2.11) | 4.84(1.79) | 3.42(1.91) | 3.20(1.91) |
| 同意度（態度）       | 4.24(1.71) | 3.37(1.41) | 4.36(1.97) | 3.29(1.60) | 4.60(1.80) | 3.44(2.25) | 3.37(2.10) | 2.90(1.50) | 4.12(2.05) | 4.35(1.80) | 3.39(1.88) | 3.21(1.93) |
| 思考の総数         | 3.44(1.32) | 3.83(2.56) | 3.48(1.12) | 3.62(1.01) | 3.56(1.04) | 3.04(1.43) | 3.40(1.03) | 3.60(1.73) | 3.32(1.41) | 3.47(1.83) | 3.00(1.41) | 2.70(1.11) |
| 好意的反応（メッセージ）  | 0.64(0.64) | 0.38(0.49) | 0.36(0.76) | 0.29(0.55) | 0.52(0.71) | 0.12(0.33) | 0.27(0.53) | 0.32(0.56) | 0.32(0.56) | 0.26(0.44) | 0.33(0.56) | 0.34(0.49) |
| 非好意的反応（メッセージ） | 1.00(0.87) | 0.70(0.75) | 0.40(0.65) | 0.67(0.70) | 0.36(0.63) | 0.28(0.68) | 0.69(0.79) | 0.60(0.76) | 1.00(0.70) | 0.73(0.86) | 0.33(0.63) | 0.30(0.56) |
| 好意的反応（説得者）    | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.04(0.20) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.38(0.20) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) |
| 非好意的反応（説得者）   | 0.04(0.20) | 0.13(0.45) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.08(0.28) | 0.00(0.00) | 0.04(0.20) | 0.00(0.00) | 0.00(0.00) | 0.04(0.21) | 0.08(0.40) | 0.04(0.21) |
| <i>n</i>      | 25         | 24         | 25         | 24         | 25         | 25         | 26         | 25         | 25         | 23         | 24         | 23         |

*M* (SD)

件： $M=3.31$ ），話題低関与条件においても信憑性の有意な単純主効果が認められた（ $F(1, 282)=10.49, p<.01$ ；信憑性高条件： $M=4.56$ ；信憑性低条件： $M=3.31$ ）。

また、卒業試験導入に対する同意度について、3（話題への関与） $\times$ 2（説得者の信憑性） $\times$ 2（論拠の質）の分散分析を実施したところ（各条件別の同意得点については、Table 2を参照のこと）、論拠の質の有意な主効果（ $F(1, 282)=8.98, p<.01$ ；強論拠： $M=4.04$ ；弱論拠： $M=3.43$ ）と説得者の信憑性の有意な主効果（ $F(1, 282)=6.43, p<.05$ ；信憑性高： $M=4.09$ ；信憑性低： $M=3.48$ ）が認められた。また、話題への関与 $\times$ 論拠の質の交互作用（ $F(2, 282)=2.32, p<.10$ ）の傾向も認められた。そのため、下位検定を行ったところ、話題高関与条件の強論拠条件と弱論拠条件の間（ $F(1, 282)=6.44, p<.05$ ；強論拠： $M=4.30$ ；弱論拠： $M=3.33$ ）と話題中関与条件の強論拠条件と弱論拠条件の間（ $F(1, 282)=7.66, p<.01$ ；強論拠： $M=4.21$ ；弱論拠： $M=3.18$ ）でそれぞれ説得者の信憑性の有意な単純主効果が認められた。

**認知反応** (a) 思考の総数：被験者の思考数を算出し（Table 2を参照）、3（話題への関与） $\times$ 2（説得者の信憑性） $\times$ 2（論拠の質）の分散分析を実施したところ、関与の主効果に傾向が認められた（ $F(2, 282)=2.49, p<.10$ ；話題高関与： $M=3.60$ ；話題中関与： $M=3.42$ ；話題低関与： $M=3.12$ ）。そのため、チューキーのHSD検定を行ったところ、話題高関与条件と話題低関与条件の間に差の傾向が認められた（10%水準、 $HSD=0.34$ ）。この結果は、関与が高まるにつれて、よりシステムティック処理が促進されることを示唆していると考えられる。(b) メッセージに関する思考：まず、好意的思考について（Table 2を参照）、3（話題への関与） $\times$ 2（説得者の信憑性） $\times$ 2（論拠の質）の分散分析を実施したところ、論拠の質の主効果に傾向が認められた（ $F(1, 282)=3.38, p<.10$ ；強論拠： $M=0.41$ ；弱論拠： $M=0.28$ ）。それに加えて説得者の信憑性と論拠の質の交互作用（ $F(1, 282)=3.32, p<.10$ ）に傾向が認められた。そのため、下位検定を行ったところ、強論拠条件において信憑性の単純主効果の傾向が認められた（ $F(1, 282)=3.49, p<.10$ ；信憑性高条件： $M=0.49$ ；信憑性低条件： $M=0.32$ ）。

非好意的思考についても同様の分散分析を行ったところ（Table 2を参照）、説得者の信憑性の主効果（ $F(1, 282)=4.64, p<.05$ ；信憑性高： $M=0.68$ ；信憑性低： $M=0.50$ ）と話題への関与と説得者の信憑性の交互作用が有

意であった（ $F(2, 282)=9.77, p<.01$ ）。そのため、下位検定を行ったところ、信憑性高条件において、関与の有意な単純主効果が認められた（ $F(2, 282)=4.21, p<.05$ ；話題高関与： $M=0.86$ ；話題中関与： $M=0.32$ ；話題低関与： $M=0.87$ ）。そのため、チューキーのHSD検定を行ったところ、話題高関与条件と話題中関与条件の間および話題中関与条件と話題低関与条件の間に有意差が認められた（5%水準、 $HSD=0.49$ ）。

(c) 説得者に関する思考：説得者に関する思考は、Table 2に示したようにほとんど生じなかった。そのため、条件ごとの検討は試みる事が出来なかった。

## 考 察

本実験では、話題への関与の程度が、ヒューリスティック処理とシステムティック処理の加算効果と減弱効果を生じさせるか否かを検討した。まず、態度の指標である評価と同意度はともに、話題低関与条件において信憑性の効果が認められ、論拠の質の効果は認められなかったことから、仮説1「話題低関与条件では、説得者の信憑性の影響のみが得られるであろう」は支持された。HSMが仮定するように、説得的メッセージを処理する動機づけが低い(ない)場合には、その説得効果はヒューリスティック処理のみの影響を受けることが、今回も確認された。

話題中関与条件においては、態度の指標である評価と同意度はともに、説得者の信憑性の効果と論拠の質の効果が双方に認められ、単純交互作用が認められなかったことにより、仮説2「話題中関与条件では、説得者の信憑性と論拠の質との両方の影響が認められるであろう」も支持されたといえよう。中程度の話題への関与が、説得効果に対してヒューリスティック処理とシステムティック処理の加算的影響を導くことが示唆された。この2つの処理モードの加算効果については、ヒューリスティック手掛かりとメッセージ内容の一致する場合に生じることが実験的に証明されているが（Maheswaran & Chaiken, 1992; Maheswaran, et al., 1992）、本実験の結果からは、中程度の話題への関与も2つの処理モードの加算的影響を導くことが示唆されるといえよう。

話題高関与条件においては、態度の測度の違いによって結果が異なっている。すなわち、評価に関しては論拠の質の単純主効果が認められ、信憑性の単純主効果は認められないという予想通りの結果が得られている。「話題高関与条件では、論拠の質の影響のみが得られるであろう（減弱効果）」という仮説3が支持されている。つまり、先行研究（例えば Chaiken, 1980）でも多く認め

られているように、高い話題への関与がヒューリスティック処理を減弱し、その結果メッセージの論拠の質のみに説得効果が影響を受ける様相が示されている。しかし、同意度の指標ではそうした結果とは異なり、論拠の質と信憑性の効果が共に認められている。態度測定の指標については、複数項目により測定された態度測度は単一項目の測度よりも妥当性や信頼性が高いことが指摘されている (Himmelfarb, 1993)。そのため、本研究では1項目で測定された同意度ではなく、4項目で測定された評価の結果を採用するものとする。しかし、話題高関与条件における結果の態度測度間の食い違いは、改めて検討する必要がある。

次に認知反応の指標では、メッセージに関する好意的思考において、論拠の質の主効果と強調論拠条件での信憑性の単純主効果に傾向が認められるという結果を得た。通常、メッセージに関する好意的思考の生成は、メッセージ内容の要因である論拠の質の変数やメッセージ処理に対する動機づけの要因である関与の変数などの影響を受けるが、ヒューリスティック手掛かりの要因の影響は受けない。しかし、説得者の信憑性もメッセージに関する好意的思考に弱い影響を与えているという本研究の結果は、話題中関与条件の被験者に加算効果が生じていることの反映かもしれない。しかし、得られた結果はあくまでも傾向という弱いものである。また、本来ならば、加算効果の反映と考えるためには、評価(態度)の指標と同様に、話題中関与条件においてのみ論拠の質と説得者の信憑性の効果が認められなければならない。上記の点から、メッセージに関する好意的思考の結果から得られた本研究の結果は解釈が困難である。

メッセージに関する非好意的思考は、信憑性低条件では話題への関与の程度に関わりなく一定であった。しかし、信憑性高条件の被験者では、話題中関与条件においてメッセージに関する非好意的思考が抑制されていた(より好意的となっていた)。この結果からも話題中関与条件における加算効果の反映を読みとることが可能かもしれない。しかし、非好意的思考に関する結果では、メッセージに関する思考に対して影響を与えるはずの論拠の質の変数の効果が全く認められないことや、信憑性高条件の被験者において話題高関与条件と話題低関与条件の両方で非好意的思考が高まっていることなど、説明できない点も多い。今回の実験では、態度に関する加算効果と減弱効果を反映するような明確な結果が、メッセージに関する好意的思考と非好意的思考については得られなかった。加算効果と減弱効果のプロセスを解明するためには、メッセージに関する思考についてより詳細な検

討が必要となろう。

本研究の知見は、関与の程度の相違がヒューリスティック処理とシステムティック処理の加算効果と減弱効果の規定因となり得る可能性を示唆しているものである。従来 of HSM に関する実験では、説得的メッセージの精緻な処理が要求される程度が特に高い場合(システムティック処理の影響のみ)と、特に低い場合(ヒューリスティック処理の影響のみ)を取り扱った研究が大半であり、この両方の場合ではない2つの処理モードの機能や説得効果に対する影響を検討した研究は少なかった。2つの処理モードに影響を与える要因を示唆しているという点では、今回の実験が示している結果は興味深いものであると言えよう。今後、2つの処理モードの生起とその説得効果に対する影響過程については、より一層の検討が必要となるであろう。

## 引用文献

- Chaiken, S. 1980 Heuristic versus systematic information processing and use of source versus message cues in persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 752-756.
- Chaiken, S., Liberman, A., & Eagly, A. H. 1989 Heuristic and systematic information processing within and beyond the persuasion context. In J. S. Uleman & J. A. Bargh (Eds.), *Unintended thought: Limits of awareness, intention, and control*. New York: Guilford Press. Pp. 212-252.
- Chaiken, S., & Maheswaran, D. 1994 Heuristic processing can bias systematic processing: Effects of source credibility, argument ambiguity, and task importance on attitude judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 460-473.
- Chen, S., & Chaiken, S. 1999 The heuristic-systematic model in its broader context. In S. Chaiken, & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology*. New York: Guilford Press. Pp. 73-96.
- DeBono, K. G., & Harnish, R. J. 1988 Source expertise, source attractiveness, and the processing of persuasive information: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 541-546.
- Eagly, A. H., & Chaiken, S. 1993 *The psychology of attitudes*. Fort Worth: Harcourt Brace Jovanovich.
- Himmelfarb, S. 1993 The measurement of attitudes. In A. H. Eagly & S. Chaiken (Eds.), *The psychology*



- of attitudes. Fort Worth: Harcourt Brace Jovanovich. Pp. 23-87.
- 伊藤君男 1999 説得事態における信憑性と期待の効果—ヒューリスティック手掛かりの組織的情報処理に対する影響— 実験社会心理学研究, **39**, 53-61.
- Johnson, B. T., & Eagly, A. H. 1989 Effects of involvement on persuasion: Meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **106**, 290-314.
- Johnson, B. T., & Eagly, A. H. 1990 Involvement and persuasion: Types, traditions, and the evidence. *Psychological Bulletin*, **107**, 375-384.
- Maheswaran, D., & Chaiken, S. 1991 Promoting systematic processing in low-motivation settings: Effect of incongruent information on processing and judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 13-25.
- Maheswaran, D., Mackie, D. M., & Chaiken, S. 1992 Brand name as a heuristic cue: The effects of task importance and expectancy confirmation on consumer judgment. *Journal of Consumer Psychology*, **1**, 317-336.
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T. 1979 Issue involvement can increase or decrease persuasion by enhancing message-relevant cognitive responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1915-1926.
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T. 1981 *Attitude and persuasion: Classical and contemporary approaches*. Dubuque, Iowa: Wm. C. Brown.
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T. 1986 The elaboration likelihood model of persuasion. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 19, pp. 123-205). New York: Academic Press.
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T. 1990 Involvement and persuasion: Traditions versus integration. *Psychological Bulletin*, **107**, 367-374.
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T., & Goldman, R. 1981 Personal involvement as a determinant of argument-based persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 847-855.
- Petty, R. E., & Wegener, D. T. 1998 Attitude change: Multiple roles for persuasion variables. In D. Gillbert, S. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The Handbook of Social Psychology*. Vol. 1. 4th Ed. New York: McGraw-Hill. Pp. 323-390.
- Taylor, S. E. 1981 The influence of cognitive and social psychology. In J. H. Harvey (Ed.), *Cognition, social behavior, and the environment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Wegener, D. T., Downing, J., Krosnick, J. A., & Petty, R. E. 1995 Measures and manipulations of Strength-related properties of attitudes: Current practice and Future directions. In R. E. Petty & J. A. Krosnick (Eds.), *Attitude strength: Antecedents and consequences*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum. Pp. 455-487.

# 註

- 3) Petty & Cacioppo (1981, 1986) の精緻化可能性モデル (Elaboration Likelihood Model: 以下 ELM と略記) も, HSM と同様に説得における二重過程に着目したモデルである。この ELM は HSM と類似した部分も多いが, 概念的には異なるものである。そのため, 本研究では ELM については言及しなかった。しかし, この2つのモデルを関連づけることも重要であると考える。この点は今後の課題としたい。
- 4) 「hypothesis」の訳語は「仮説」ではあるが, ここに示されている additivity hypothesis, attenuation hypothesis は対立しているものではなく, ヒューリスティック処理とシステムティック処理の相互作用の異なった様相を補完的に説明しようと試みているものである。そのため, 「仮説」という訳語は適切ではないと判断し, 「効果」という訳語を用いた。なお, HSM ではヒューリスティック処理とシステムティック処理との相互作用の様相として加算効果・減弱効果以外に, バイアス効果 (bias hypothesis) も仮定している。しかし, 本研究は加算効果・減弱効果の検討を目的としているため, バイアス効果については触れないものとする。バイアス効果については, Chaiken & Maheswaran (1994), Chen & Chaiken (1999) などを参照のこと。
- 5) すべての従属変数において, 2 (学校) × 2 (性別) × 3 (話題への関与) × 2 (説得者の信憑性) × 2 (論拠の質) の分散分析を実施したところ, 学校および性別に関する主効果および交互作用が認められなかったため, 本実験の分析においては学校と性別の2つの要因については言及しないものとする。

## Additivity of Heuristic and Systematic Processing in Persuasion: Effects of Source Credibility, Argument Quality, and Issue Involvement.

KIMIO ITO (*Aichi Gakuin University*)

The present study examined the influence of heuristic processing and systematic processing on persuasion (The heuristic-systematic model; Chaiken, 1980). Participants received either a strong or a weak persuasive message attributed to a high-credibility or a low-credibility source. When the participants' issue involvement was high, their attitudes were influenced only by the strength of arguments. When participants' issue involvement was moderate, their attitudes were influenced by the strength of arguments and by the communicator's credibility. When the participants' issue involvement was low, their attitudes were influenced only by the communicator's credibility. These results were in line with the assumption that the two types of processing occur simultaneously, influencing each other.

**Key words:** heuristic-systematic model, additive hypothesis, source credibility, issue involvement.

( 2001年2月16日受稿 )  
( 2002年1月15日受理 )